

第9回

岩尾 研二
阿嘉島臨海研究所

国際サンゴ礁シンポジウム (バリ)

Report on the 9th International Coral Reef Symposium, Bali

K. Iwao

2000年10月21日午前11時、谷口研究員と私はガルーダ・インドネシア航空 881 便に乗り込み、ジャカルタ経由でバリ島へ向かいました。その地で翌々日10月23日から27日までの5日間にわたり開催される第9回国際サンゴ礁シンポジウムに参加するためです。前々回のグアム、前回のパナマに続き、阿嘉島臨海研究所が設立されてから3回目の大会です。やはり当研究所から今回のシンポジウムに参加した保坂理事長や下池研究技術員は、過去2回の大会にも参加していますが、私達が参加するのは初めてで、どのような雰囲気の中で開催されるのか、どのような発表があるのか、前夜は大会要旨集を見ながら、期待を膨らませていました。

世界的に高まるサンゴ礁研究への関心を反映して、参加者は、過去最高のおよそ1500名。発表されたテーマ数も、大会要旨集によると一般講演が1079、ポスター発表が341で合計1420件にも上り(いくつかは発表者の都合などでキャンセルになりましたが)、過去最多であった前回はさらに上回りました。一般講演については、これらの発表が、58ものセッションに分けられていました。単に生物学的知見にとどまらず、「資源管理」や「アセスメント、モニタリング、回復」、さらには「社会・経済学的討論」についてのセッションも設けられ、また、1998年の世界的規模の白化現象や地球環境の変化についての関心に呼応して「サンゴ礁の未来」に関するセッションが9つも設けられていました。

今回、谷口研究員が「阿嘉島における造礁サンゴの白化とその後の推移」、下池研究技術員が「阿嘉島における10年間のサンゴ産卵研究」、そして私が「神経ペプチドによるミドリイシ属サンゴの変態誘引」について、それぞれポスター発表を行いました。先述のとおりポスターの数が多く、上下二段で屏風状にびっしりと並べられた会場は、準備の段階で「こ

れでどうやって発表するんだろう」と不安を抱かせるものでした。その不安どおり、発表者立ち会いの時間帯(1時間



半だけでした)は人が溢れ返り、誰がどのポスターの発表者なのかさっぱりわからない状態で、質問に答えていても「ちょっと失礼」と道を譲りながらのもので、途中からはさながら懇親会のようなもので、ただ、そのおかげで、Peter Harrison 博士(サンゴの有性生殖研究で著名)や Bert W. Hoeksema 博士(クサビライシ分類の第一人者)と初めてお話をでき、また、研究所にお見えになったことのある多くの研究者の方と再会することができ、私にとっては楽しいひと時でした。

また、9つの基調講演が行われ、その1つとして当財団理事でもある大森信教授(東京水産大学)が「日本のサンゴ礁とその研究」についてビデオ映像を交えて講演され、パラオ熱帯生物研究所に始まる日本のサンゴ礁研究を紹介されました。ビデオでは、日本のサンゴ礁の景観が映し出され、その美しさは海外研究者にも伝わったようでした。今大会中、一つの大きなニュースが伝えられました。それは、次回2004年の第10回大会が沖縄で開催されることに決定したというものです。大森教授の講演にあったパラオ熱帯生物研究所の時代にはサンゴ礁研究の先進国だった日本で、21世紀最初の国際サンゴ礁シンポジウムが開催されるのです。どのような大会になるのか、サンゴ礁研究者の一人として身の引き締まる思いがしました。最後になりますが、シンポジウム参加の機会を与えていただいた保坂理事長と大森教授に深く感謝いたします。